桜の聖母学院新聞

発行所
福島市野田町七丁目11番1号
桜の聖母学院高校新聞部

卓球部 2年連続 全国ベスト16

2年連続ベスト16入りを果たした卓球部

コロナ禍による中止をはさんで、16期連続でインターハイ全国大会に駒を進めた、本校卓球部。昨年の団体ベスト16を上回るべく、8月12～17日に大阪市のAsueアリーナ大阪で開催された近畿総体の卓球競技で、女子学校対抗戦・同ダブルス・同シングルスに臨んだ。

学校対抗戦では、1回戦で鹿児島県代表の鹿児島城西を3―0で圧倒。2回戦の京都府代表龍谷大平安との試合は、1、2番を落として後がなくなったが、3番のダブルスで3年生ペアがフルゲームの末に勝利すると、4番のエース長谷部真奈さん（3年3組）がしっかり勝ち、勝負の行方は5番のシングルスに。ここで三浦諒子さん（2年2組）は最終ゲームで1―4の劣勢から逆転勝ちし、3―2で劇的な逆転勝利を収めた。3回戦は高知県代表の明徳義塾に0―3で敗れたものの、すべてあと1点まで迫る大健闘で、昨年に続きベスト16という、確かな爪痕を残した。

ダブルスは1回戦敗退、シングルスは1名が1回戦敗退、3名が2回戦敗退という悔しい結果だったが、選手たちが持てる力を発揮できた大会となった。

続いて8月28～30日に南相馬市で開催された、第53回東北総合スポーツ大会卓球競技に、福島県少年女子代表チームで、本校からは小林直哉先生を監督に、長谷部さんと木村利渚さん（3年2組）、三浦さんが出場。今年度は国民スポーツ大会（旧国民体育大会）の出場枠が、東北からは開催県の青森県を除いた2県に減ったため、初日から厳しい試合となったが、福島県代表として3年連続出場の木村さんを中心に善戦。初戦の対青森県戦で勝利して勢いに乗り、続く4県との対戦でもすべて勝って全勝優勝を果たした。少年女子の部では2年連続優勝、卓球競技全体でも福島県が2年連続6回目の総合優勝を果たすことができた。

国民スポーツ大会卓球競技は、10月10日から青森市カクヒログループスーパーアリーナで開催される。初戦は天覧試合になる予定。この勢いでぜひ全国の頂点を目指してほしい。

全国総文祭にも出品

矢野さんの作品「四次元ロッカー」

運動部の最高峰が全国高校総合体育大会（インターハイ）なら、文化部のそれは全国高校総合文化祭（総文祭）だ。今年は秋田県で開催され、その美術・工芸部門に6点の福島県代表の一つとして推薦出品されたのが、美術部・矢野紗彩さん（3年1組、この紙面の右下写真の左側の生徒）の「四次元ロッカー」。昨年度の第79回福島県総合美術展覧会で、福島県教育委員会教育長賞を受賞した作品だ。

美術部顧問の片平仁先生は、「JKと称される世代が、その繊細で複雑な、そしておもちゃ箱のような精神世界を表現することは容易なことではありません。この作品は、それを絵画で表現することに成功した稀な作品と言えると思います。柔軟な構成と細部の表現までこだわり抜いた傑作です」と解説した。

「桜の聖母」誕生から80年

2年後には創立90周年を祝う

終戦の翌年1946（昭和21）年、初めて桜の聖母を校名とする「桜の聖母学院初等学校」が開校、今年はそれから80年となる。一方で2年後の2028年、桜の聖母学院は創立90周年を迎える予定だ。この8年の違いはどこからくるのか。この機会に改めて本校の歴史をひも解くと、この8年間に苦難と悲しみ、そして希望の歴史が詰まっていることが分かってきた。

1946年桜の聖母学院初等学校設立時の児童たち

ここ福島の地に、カナダのモントリオールから5名のカトリック修道女（シスター）が来日したのが、二つの世界大戦の間の1932（昭和7）年。シスターたちは福島市民に洋裁や料理、語学などを教えながら、病人を訪問するなど献身的な活動を繰り広げ、1935（昭和10）年には現在の花園町に、カナダからの寄付を元に西洋風の修道院が落成した。その修道院の敷地内に、待望の教育施設である「雛菊（ひなぎく）幼稚園」を開園したのが1938（昭和13）年で、再来年の2028年にはこの年から90周年を迎える。

ところがその翌年には第二次世界大戦が、そして1941（昭和16）年12月には太平洋戦争が勃発。幼稚園は閉鎖、修道院は接収され、敵国人となったカナダ人シスターたちは会津若松に他の修道会のシスターと共に抑留され、監視のもとに軟禁生活を余儀なくされた。しかしこの苦難の時期にもシスターたちは、この戦争が終わったら戦災孤児を集めて小学校をつくりましょう、という希望を持ち続けていたという。

1945（昭和20）年の終戦により、戦時中は外国人捕虜の抑留所となっていた花園町の修道院に戻ったシスターたちは、小学校の開設に奔走。翌1946（昭和21）年、16名の戦災孤児をはじめとする児童で桜の聖母学院初等学校が開校、翌年の学制改革で桜の聖母学院小学校と改名された。桜の聖母の校名は、神の母・聖母マリアの精神がこの日本の地で花開くことを願ってつけられたということだ。

その後しばらくの間この1946年が桜の聖母学院の創立年とされ、1996（平成8）年には桜の聖母学院50周年の節目を、県文化センター（現とうほうみんなの文化センター）で、教職員生徒をあげて盛大に祝っている。だが2000年代に入り、創立年を雛菊幼稚園開園の1938年に遡って変更する決定が行われたことにより、現在公式には2028年が90周年になる、というわけだ。

幼稚園から短大までを持つ福島県内唯一の総合学院として歩みを続けてきた、桜の聖母学院。今年春の中学校の花園町移転と共学の小中一貫校の開設、野田町キャンパスに残った高校には通信制の併設といった、時代や地域の要請に応える発展を、これからも続けていくことだろう。

1932（昭和7）年
カナダから5名のシスターが来日
1935（昭和10）年
花園町に修道院落成
1938（昭和13）年
雛菊幼稚園開園
1941（昭和16）年
太平洋戦争が勃発し、幼稚園は閉鎖、修道院は接収、シスターたちは会津若松に抑留
1945（昭和20）年
終戦に伴いシスターたちは福島に戻る
1946（昭和21）年
桜の聖母学院初等学校開校
1947（昭和22）年
学制改革で桜の聖母学院小学校に改名
1949（昭和24）年
小学校一期生の卒業に伴い、桜の聖母学院中学校を開校
1952（昭和27）年
中学校一期生の卒業に伴い、桜の聖母学院高等学校を開校
1955（昭和30）年
桜の聖母短期大学開校、県内唯一の総合学院が完成
1975（昭和50）年
生徒数増加に伴い、市内野田町に新キャンパスを開設、中学校高等学校が移転。花園町キャンパスには短大と小学校・幼稚園が残る
2000（平成12）年
花園町に短大新校舎と新修道院が落成し、それまでの修道院は「祈りと研修の家」に
2011（平成23）年
3月に東日本大震災発生、戦前からの歴史を伝えてきた祈りと研修の家は大きな損傷を受け、惜しまれながら年末に解体される
2026（令和8）年
中学校が花園町に移転し、小学校と合併して共学の小中一貫校に。野田町キャンパスの高校に通信制を併設

校歌

美しきわがまなびや
山脈はめぐりて高きその姿
黄金なすそのやすらいに
汝をば育み
黄金なすそのやすらいに
みそらはほほえむ

紙面紹介

2面 ●中間貯蔵施設で考える 福島の未来と私たちの責任
●私の学生時代 ～伊藤夕美先生の巻

高校単独で桜華祭開催

風船の数は減ったが毎年恒例のオープニング

毎年夏の終わりに開催される、県北地区唯一の女子校である本校の文化祭「桜華祭」は、中高一貫校として中学校と高等学校合同で催されてきたが、今年の春に中学校が花園町キャンパスに移転したため、今回から高校単独での開催となった。そのためこれまでの土曜日午後の半日と日曜日全日の1日半の公開期間を、日曜日のみとするなど縮小を余儀なくされたが、高校生はその分を挽回すべく、全力で準備に取り組んだ。

ここ数年の猛暑と異なり涼しい小雨の中での開催となった、8月30日(日)の一般公開では、保護者や卒業生、桜の聖母学院小中の生徒、地域住民や他校生など一般客約800人が来校。講堂ステージでの書道パフォーマンスや文科系各部の発表を楽しみ、保護者会「桜の会」による食堂や各種キッチンカーに舌鼓を打ち、コロナ禍以来7年ぶりに復活したバザーにも人だかりができていた。

メインイベントである、1年生から3年生までの全クラスが趣向を凝らして各教室で開催した展示については、来場者に投票してもらい、その結果1位の桜華祭大賞には3年1組の「三年一組臨時捜査本部」が輝き、2位の準桜華祭大賞には、3年2組の「合法ですーカジかじKASINO」が選ばれた。その差はわずか3票という大接戦だった。

3年1組の展示は、来場者に捜査員になってもらい、まず4人の容疑者の取り調べの様子を、事前に録画した動画映像で視聴してもらって、それをヒントに犯行現場に残された証拠から真犯人を見つける、というもの。4人の容疑者には先生方が扮したが、そのうち真犯人だったのは伊藤俊之先生。伊藤先生が一般公開の間に校内を巡回していると、見ず知らずの来場客から「あ、犯人だ！」と指差されたり、後ろから「あれ、犯人じゃない？」とささやく声が聞こえたというから、よほど印象に残る展示だったのだろう。

この野田町キャンパスに高校があるうちは、高校のみでの開催が続くが、将来花園町に移転した時には、どのような文化祭に発展するのか、期待したい。

桜華祭大賞を獲得した3年1組

はりこ新聞

▼今年の夏は、ここ数年の全国的な猛暑とは打って変わって不安定な夏となった。東北地方などでは雨が降らず猛暑という二極化。加えて台風の発生数は、55年ぶりのハイペースとなっている▼そんな猛暑の中で7月28日、熊本県をマグニチュード7・1の大地震が襲った。死者数は39人、避難者は一時1万4千人を超えた。国内で震度7を観測したのは、2024年元旦の能登半島地震以来となる。何より熊本は、10年前の地震に続く大規模災害だ▼今回、2011年の東日本大震災の教訓を生かした、行政の緊急支援体制の進化が見られた。東日本大震災当時は、自治体庁舎の被災によって現場からの要請が滞り、物資不足が深刻化した。その反省から、被災自治体の要請を持たずに物資を届ける「プッシュ型支援」が展開され、物資不足緩和に大きく寄与した。また被災した自治体に、それを支援する自治体を1対1またはグループで決めて助け合う「対口（たいこう）支援」によって現場の混乱が大幅に軽減された▼その一方で、被災地に寄せられた着られない古着や千羽鶴、賞味期限切れの食品などは、善意であっても現場の負担になってしまった。「今は個人物資の直接送付を控え、義援金や指定された物資に絞ってほしい」と呼びかけられたほか、本当に正確な災害情報だけを元に、滞りなく避難所や在宅避難者へ届ける努力がなされた▼また今回の地震では、真夏の熱中症対策や避難生活での二次被害を防ぐソフト面の対策にも、力が入れられた。過去の悲劇から学んだ教訓が、最新の技術や制度と結びついて命を守る力になっていっている▼起こってしまった災害への対応も重要だが、同時に災害を未然に防ぐ努力も続けなければならない。8月26日、ネパールと中国の国境付近で起きた、大規模な岩石・氷河なだれとそれに伴う洪水災害は、死者千人以上、行方不明者は日本人家族5人を含め4千人以上となっている▼今回の災害が、地球温暖化に伴うヒマラヤ山脈の氷河の融解に関連しているのは明白だ。そして温暖化の原因は、二酸化炭素などの温室効果ガスだ。人類はその削減で、温暖化を食い止められるのか。他人事ではなく、私たち一人ひとりの選択と行動にかかっている。

堀江先輩の案内で行く 東北福祉大学キャンパス見学記

今年3月1日発行の第143号では、その日に卒業を迎えた昨年度3年生の中から、見事第一志望に合格を果たした数名の「合格体験記」を例年通り掲載したが、その中で東北福祉大学に合格した堀江姫彩先輩の名前を、誤って「堀井」姫彩と記載してしまった。ここに謹んでお詫びと訂正を申し上げると共に、その罪滅ぼしを兼ねて8月初めに東北福祉大学を訪れ、堀江先輩に案内していただいた。（2面に関連記事「私の学生時代」）

国見キャンパス西門にて、左端が堀江先輩

曹洞宗の学校がなぜ「福祉」を？

新聞部ではこれまで、隣県宮城県の県庁所在地である「学都」仙台やその周辺の大学の中から、先輩たちが進学した東北大学・東北学院大学・宮城教育大学・宮城大学の4校を取材してきた。そうなるとその規模や存在感からも、次は東北福祉大学になるだろうことは、部員一同分かってはいた。今回「怪我の功名」ではないが、思わぬ形で背中を押され、東北福祉大学の取材が実現したわけだ。

ちなみに校名に「福祉」が入る大学は、全国に17校。その中には「医療福祉」や「健康福祉」等も含まれるが、純粋に地名プラス「福祉」を名乗る大学は、兵庫県の関西福祉大学、愛知県の日本福祉大学、静岡県の静岡福祉大学、なぜか群馬県伊勢崎市に本部のある東京福祉大学（来年度統合され開智大学となる予定）、そしてこの東北福祉大学だ。ところがその名前だけから、ああ医療&福祉系の大学ね、と思い込むのは早い。実は、私たちの桜の聖母学院がカトリックの、仙台の東北学院や宮城学院がプロテスタントのミッションスクールという、宗教を基盤とする学校であるのと同様、東北福祉大学は仏教の中の曹洞宗を土台に持つ学校なのだ。それゆえ同じ曹洞宗系の駒澤大学などとは、姉妹校の関係にある。ではなぜ、曹洞宗の大学が「福祉」なのか。

歴史や倫理の授業で習う通り、曹洞宗は鎌倉時代に道元禅師が宋から持ち帰った禅宗の一派で、日本の仏教の諸宗派の中でも最大規模の信徒数を持つ。大本山は福井県の永平寺と横浜市の総持寺で、早朝から坐禅を組む姿がテレビ番組や教科書などで紹介される。そこから受けるイメージは、俗世から離れひたすら座って悟りを得ようと修行しているように見えるが、実はこの曹洞宗、諸宗派の中でも特に実践を重んじる宗派なのだ。1992年より曹洞宗は「人権・平和・環境」というスローガンを掲げ、禅の精神を現代社会に生かす取り組みを続けている。「福祉」はまさに現代に求められる分野であり、この大学がそこに着目したのも、曹洞宗の教えがあってこそ、と言えよう。

そしてこの大学のもう一つの「顔」は、数多くのスポーツ選手を輩出していること。「大魔神」佐々木主浩さんをはじめとする多くのプロ野球選手をはじめ、プロゴルファー、バレーボール、フィギュアスケート等々、全日本レベルやオリンピック級の選手たちは、とうていこの紙面では紹介しきれない。

国見キャンパス内にある「坐禅堂」

体育館や学食が入る、仏教的な外観の「福聚殿」

100年前に仙台市国見の地へ

その歴史は古く、大学を運営する学校法人は1875（明治8）年、現在の東北学院大学五橋キャンパスにほど近い仙台市荒町に設立された「宮城県曹洞宗専門学支校」に遡り、昨年には創立150周年を迎えた。その後校名を変えつつ、ちょうど100年前の1926（大正15）年に、仙台市北西部の現在の国見キャンパスの場所に移転。そして戦後の1958年に初めて「福祉」を名乗る東北福祉短期大学が発足、1962年には短大を廃止し現在の東北福祉大学が誕生、日本全国から学生が集まってくるようになった。

当初は社会福祉学部の1学部体制だったが、2000年に総合福祉学部に改称、さらに2006年に子ども科学部や健康科学部、2008年に総合マネジメント学部等を次々と設置。2015年の改組で教育学部が誕生、2025年には共生まちづくり学部が設置されるなど、時代の要請に応え続けている。

この目覚ましい発展にJR東日本も応え、2007年には仙台と山形を結ぶ仙山線の北山駅と国見駅の間に「東北福祉大前駅」が新設され、駅舎に隣接する「ステーションキャンパス」も竣工された。ただこの駅から本部の国見キャンパスまでは、細い坂道を15分ほど歩いて、丘の上の住宅街に囲まれた複雑な形状のキャンパスにようやくたどりつく。キャンパス内も坂や階段が多く、しかも数年越しの大規模工事の真っ最中ということもあって、分かる人の案内がないと迷ってしまう。

堀江先輩のきっかけはこの新聞！

そこで私たちを案内してくれたのが、教育学部教育学科初等教育専攻1年の堀江姫彩先輩だ。堀江先輩は福島市立渡利中学校から桜の聖母学院高校総合進学コースに入学、高校時代はテニス部で黄色い球を追い続けてきた。その堀江先輩が東北福祉大学を志望するようになったきっかけは、1年次の終わりの2024年3月1日に発行されたこの桜の聖母学院新聞の、合格体験記だったという。そして2年次夏のオープンキャンパスに参加して第一志望校に決め、翌年公募推薦で見事に教育学部に現役合格を決めた。

幼稚園教諭を目指し教育学科初等教育専攻を選んだものの、実は先輩はピアノの経験が全くなく、入学後さっそく始まったピアノの授業では、初心者クラスに同様の仲間と共に入り、猛練習によってこの数カ月の間に両手で弾けるようになった。そんな大学の授業にもひと通り慣れた最近、近所のドラッグストアでアルバイトも始めた。アパート大学とバイト先との往復で一週間が終わるため、仙台市の中心部に遊びに出ることなどまずないという。部活動は高校時代とは打って変わって、小さな子どもを対象にするボランティア系のサークルに入っている。大学生活で苦労していることは、時間割が曜日によって不規則なため、生活リズムを整えるのが難しいことだそうだ。私たち高校生が、毎朝決まった時間に登校することは、今は気付かないが実は大切な生活習慣なのかもしれない。

1年生は全員必修の坐禅の授業だが、すでに3回受講し、少しずつ時間が延ばされているとのこと。私たち桜の聖母学院出身者は、毎日の授業前の「立腰黙想」を経験しているので、足の組み方さえ慣れれば結構すんなりと馴染めそうだ。なお坐禅の授業は専用の坐禅堂で行われ、周囲は独特の厳かな雰囲気に包まれていて、まるで本校チャペルのようだった。

また数百人が受講できる階段状の大教室も見学したが、出席はどうやって取るのかというと、先生がスクリーンに出すその日の授業のコードを、学生専用のアプリで入力するそうだ。さらにこの大学が誇る音楽堂「けやきホール」は、さすがにパイプオルガンこそないものの公営のコンサートホールさながらの、大変立派な施設だった。

総合マネジメント学部は2025年度の共生まちづくり学部の新設により募集停止となったが、総合福祉学部・共生まちづくり学部・教育学部・健康科学部で様々な資格を取得できる東北福祉大学を、ぜひ検討してみてはいかがだろうか。

震災・原発事故から15年

福島の未来と私たちの責任

中間貯蔵施設で考える

近頃ニュースでよく聞く「福島県内の除染で出た土は、2045年までに福島県外で最終処分することが法律で定められている」という言葉。だがそれを知っているのは、福島県民の2人に一人の約5割、国民全体ではわずか1割だという。私たち新聞部11名は、8月に浜通りの大熊町と双葉町にまたがる「中間貯蔵施設」を訪れ、実際にその施設に入って環境省の方からお話をうかがうという、貴重な取材の機会に恵まれた。

手前のタンクには「処理水」が入っている（写真11）

旧「サンライトおおくま」に設置された展望台から、1・4㎞先に福島第一原発を望む（写真10）

原発事故で降り注いだ放射性物質

2011年の東日本大震災と、それに伴う東京電力福島第一原子力発電所（以下「福島第一原発」）の事故から、今年で15年という節目を迎えた。現在の私たち高校生は、おぼろげながら「行列に並んだ」「水汲みを手伝った」といった記憶のある3年生を除けば、生まれてはいたもののほぼ記憶にない世代に移行する節目に位置する。だから「ベクレル」「シーベルト」「除染」「仮置場」そして「中間貯蔵施設」といった、事故後からにわかに広まったとされる言葉を、聞いたことはあってもリアルタイムの自分事として理解することはほとんどなかった。だからこそ今回、15年前に何が起こり、その後どんな事態が展開して、いま復旧・復興はどこまで進んでいるのか、自らの目で確かめる機会を得たことは、たいへん貴重な体験となった。

2011（平成23）年3月11日金曜日の14時46分、三陸沖でマグニチュード9・0という、日本の観測史上最大、世界でも1900年以来4番目となる巨大地震が発生。それに伴う大津波により、主に岩手・宮城・福島の東北地方太平洋側3県で2万人近い死者・行方不明者を出すという、戦後最大の自然災害となった。加えて福島県の太平洋に面した浜通りでは、大熊町と双葉町にまたがる福島第一原発が、地震の揺れと津波によって全電源が喪失。1・2・3号機の冷却が不可能となって炉心溶融、いわゆるメルトダウンという最悪の事態に陥り、政府は原子力緊急事態宣言を発令。さらに翌日の水素爆発によって、大量の放射性物質が拡散された。1986年の旧ソ連のチェルノブイリ（ウクライナ語でチョルノービリ）と並ぶ、レベル7という史上最悪の原発事故となったが、直接の犠牲者が出なかったことが不幸中の幸いともされる。ただし避難の途中で命を落とした病人やお年寄り、事故処理の陣頭指揮をとって2年後に亡くなった吉田昌郎・福島第一原発所長（当時）らも、犠牲者と見ることができるかもしれない。

なおメルトダウンした核燃料は、構造物と混じった「燃料デブリ」となって福島第一原発の地下に溜まっており、その量は推計880㌧、今でも致死量をはるかに超える強烈な放射線を発している。2年前にそのうちの1㌘弱の取り出しに成功したニュースが流れたが、すべてを取り出して「廃炉」まで持って行くには、いったいどれだけの年月がかかるか誰にも分からない、人類初の難事業が今も続いている。

事故で大気中に放出された放射性物質は、福島第一原発から同心円状に広がったわけではなく、当時の風向きによって主に北西、すなわち私たちの住む県庁所在地福島市の方角に飛散。原発が立地する大熊町と双葉町はもちろん、双葉町に隣接する浪江町や、さらに北西の飯舘村、その西隣に位置する中通りの川俣町の一部にも及び、これら12市町村の自治体の住民は避難を余儀なくされ、この中には今でも「帰還困難区域」とされて、住民が戻って住むことのできない地域も存在している。

川俣町に隣接する福島市は、避難こそ強制されなかったものの通常より高い放射線量を計測。学校ではグラウンドなど屋外で行う体育の授業や部活動が禁止される事態となり、子どもを持つ保護者の中には他県への「自主避難」を行った家庭もあった。成長期にある子どもの甲状腺は、ヨウ素を取り込む性質があるが、放射性物質の中の放射性ヨウ素を区別できずに取り込んでしまうと、甲状腺がんになる可能性が高まるからだ。私たち2011年以前の生まれであの時に福島にいた子どもたちが、今でも定期的に甲状腺検査を受けるのはそのためで、あと数年経って2012年以降生まれの子どもたちになれば、もうこの検査も必要なくなるが、いずれにせよ決して起こってはならない事態が起こってしまったのが、15年前の福島第一原発事故だったというわけだ。

2045年までに「県外」で最終処分

現代の科学では、放射性物質を人間の力で無害化することはできず、時間と共に減衰するのを待つしかない。宇宙戦艦ヤマトが、はるかイスカンダルまで航行して持ち帰った放射能除去装置は、まだ見ぬ夢の技術なのだ。放射性物質が自然に半分になる「半減期」は、種類によって千差万別で、前述の放射性ヨウ素の中のヨウ素132のように約2時間というものもあれば、セシウム137のように30年のものもある。それでも、あくまでも半分になるだけだ。

ただし福島第一原発に流れ込む、放射性物質に汚染された「汚染水」を「多核種除去設備（ALPS）」によってトリチウム以外の放射性物質を吸着・ろ過して取り除き「処理水（ALPS処理水）」にするといった方法や、放射性物質を含む表土を削り取る「除染」は、現在で可能な最善の措置ということになる。

原発事故以降、森や林に降り注いだ放射性物質は、やがて雨で流され地表に溜まる。田んぼや畑、そして学校の校庭などにも放射性物質は降り積もっていた。

除染作業中の本校グラウンド。2011年8月撮影（写真1）

2011年から福島県内各地で繰り広げられた光景は、放射性物質で汚染された表土を重機などで剥ぎ取る「除染」という作業で、本校でも同年8月に実施された（写真1）。そこで分離された除染土は、黒や青色のフレキシブルコンテナバッグ（通称フレコンバッグ、1㌧入るので「トン袋」とも呼ばれる）に詰められ、2015年頃までは県内各地の「仮置場」に集積されていた（写真2）。

しかし生活の場のすぐ隣に、除染土をいつまでも置いておくわけにはいかない。国は、原発事故によりほぼ全域が帰還困難区域となっていた、福島第一原発を囲む大熊町と双葉町に、県内で出た除染土をいったん集積する施設を計画。福島県や両町、地権者との交渉の末、2014年から翌年にかけて「中間貯蔵施設」の建設が容認された。ただしその条件は、「中間貯蔵開始から30年以内に、福島県外での最終処分を完了する」というもので、2014年最終改正の「中間貯蔵・環境安全事業株式会社法」という法律に盛り込まれた。

震災から数年間は県内のいたるところに「仮置場」があった。2014年桑折町で撮影（写真2）

そもそも福島第一原発、および今回は難を免れたが廃炉が決まっている福島第二原発は、首都圏に電力を供給する東京電力が建設・運転していたもので、我々福島県民はその電力を使用していない。今回の事故のしわ寄せを、その福島県に負わせるのはあまりにも理不尽という県民感情を、少しでも反映した条件だったと言えよう。だからあくまでも「中間」貯蔵施設であって、最終処分場ではないのだ。そして2015年より除染土の搬入が開始され、県内各地の仮置場から、除染土を詰めたフレコンバッグが搬入されていった。そのおかげで県内各地の仮置場は姿を消し、現在の私たち高校生の世代で仮置場の光景を記憶している者はほとんどいない。

あっという間に10年の月日が流れ、最終処分の期限までであと20年を切り、その土はすでに東京の首相官邸や霞が関の官庁に運ばれて植栽などに利用されており、先月には東京以外では初めて仙台とさいたま新都心の、国の出先機関に運ばれたことがニュースとなったが、まだまだ微々たる量だ。実に1400万㎥＝東京ドーム11杯分の土を、あと20年足らずの間にこの中間貯蔵施設から県外に運び出し、受け入れてもらうという、タイムリミットのない燃料デブリの回収よりもある意味で至難のプロジェクトとなっている。私たちはまずこの現実を知るべきなのだ。

「中間貯蔵施設」は建物ではない！

今回この中間貯蔵施設への取材が実現したのは、2年前のこの新聞の「福島県立医大キャンパス見学記」で案内してくれた、本校卒業生で医学部に入学した山村桃花先輩のおば様にあたる方が、環境省福島環境局中間貯蔵部にお勤めになっていて、ぜひ高校生に現状を学んでもらいたいと来校されたことからだった。未来の福島を担う私たちの世代が、この現実から目を逸らすわけにはいかない。ただその時点で私たちは「中間貯蔵施設」という言葉から、巨大な倉庫のような建物の中にフレコンバッグが山積みされた光景を、勝手に想像してしまっていた。

ここ数年の猛暑と異なり不安定な天候の続く8月、あいにくの大雨の中を福島駅から環境省がチャーターしてくれたマイクロバスで（写真3）、東北中央道と常磐道を経由し、最初に大熊町の南の富岡町へ。実は双葉町の「東日本大震災・原子力災害伝承館」や、南相馬市小高区の「俺たちの伝承館」などは、ここ数年で取材しこの紙面で紹介してきたので、今回はまだ新聞部が行っていなかった「とみおかアーカイブミュージアム」に、まず連れて行っていただいた。

環境省がチャーターしてくれたバスで浜通り往復（写真3）

とみおかアーカイブミュージアムに展示されている、津波に押し潰されたパトカー。この前では誰もが手を合わせる（写真4）

ここでは3・11に富岡町で何が起こったか、リアルに学ぶことができた。富岡町民はあの日に何も知らされないまま、西隣の川内村に避難させられたが、ここも危険となって途方に暮れていたところ、前年に姉妹都市の協定を結んでいた埼玉県杉戸町が大型バスを送ってくれて避難できたこと。そしてこのミュージアムの象徴である、津波に押し潰されたパトカーの展示（写真4）。あの時、富岡川の河口で住民に避難を呼びかけ続けた2人の警察官が、津波に飲まれて殉職した。見学者はこのパトカーの前で、自然に手を合わせる「聖地」だ。

続いて大熊町の中心地、JR常磐線大野駅前に、昨年3月にオープンしたばかりの複合施設「CREVA おおくま」へ移動。CREVAが「来れば？」のことだと分かったのは、福島に戻ってからのことだった。ここには今回私たちを招いてくださった、環境省と中間貯蔵・環境安全事業株式会社（JESCO）が運営する「中間貯蔵事業情報センター」が入っている。見学者はまずここで中間貯蔵事業についての概要を学び（写真5）、事前に予約をしておけば実際に中間貯蔵施設内に入って見学することができる。

中間貯蔵事業センターで動画で概要を学ぶ（写真5）

ここで私たちは、一人ひとりに線量計を渡された。その時ようやく分かったのは、中間貯蔵施設というのは建物ではなく、帰還困難区域の中に広がる広大な土地のことだということ。その広さは南北に約7・7㎞、東西に約3・3㎞に及ぶ（写真6）。バスに乗ったまま、普段は封鎖され一般人は入れないゲートを開けてもらって施設内に入ると、その中は15年前のあの日に住民が避難したままの、タイムカプセルだった。330名の児童が在籍していた熊町小学校のグラウンドは、もはや密林となっており、外から見る教室内（写真7）は、津波警報を受けて避難した時点ほぼそのままの状態。今から2年前には当時の児童に、一度母校に入って思い出の品を持ち帰ってもらう企画が行われたそうだが、13年間のうちに避難先で様々な辛い思いをして、もう故郷のことを思い出したくないという人などは来なかったとのことで、そのまま残されている学用品が痛々しかった。

中間貯蔵事業情報センターにて。壁面の地図は南北約7.7㎞、東西約3.3㎞の中間貯蔵施設を示している（写真6）

15年前の3月11日に避難した状態でほぼそのまま残っている、熊町小学校1年生の教室（写真7）

続いてバスで、いよいよ大熊1工区土壌貯蔵施設へ（写真8）。私たちが立っている足元には、福島県内から集積された除染土が埋まっているが、その上にさらに汚染されていない土が積まれているため、線量計は現在の福島市（0・108マイクロシーベルト毎時）や郡山市（同0・117）とほとんど変わらない数値を示しており、私たちは安全だった（写真9）。

大熊1工区土壌貯蔵施設にて、環境省担当者のお話をうかがう（写真8）

そして最大のサプライズは、元は特別養護老人ホームだった「サンライトおおくま」。ここもあの日に入所者は全員避難し、15年前そのままに残されていたが、庭に仮設された展望台からは、わずか1・4㎞先に廃炉作業中の福島第一原発が、手に取るように見える（写真10）。クレーンとALPS処理水の入ったタンクに囲まれた原発建屋を、こんな近くに肉眼で見ることができるとは思いもよらなかった（写真11）。

東京電力は福島第一原発を、人類はただ見守るしかない「石棺」に覆われたチェルノブイリ原発のようにはしない、最後まで廃炉を完遂して元通りにして返還するとしているが、果たして私たちが生きているうちに可能なのか。未来の世代に負の遺産を遺すことになりはしないか。除染土についても同様だ。福島にすべてを押し付けることは確かにおかしいが、果たして全ての県外処分は可能なのか。案内してくださった環境省職員の方の「正しく恐れることが大切」という言葉に、大いに考えさせられた、あまりにも中身の濃すぎる日帰り取材だった。

大熊1工区の放射線量は、現在の福島市や郡山市より若干高いくらい（写真9）

私の学生時代
伊藤 夕美先生の巻

私の学生時代、それはほんの少し前のことである。この記事の依頼をいただいたとき、自分の学生時代のどこを切りとり伝えようか、かなり悩んだ。私は幼稚園から高校まで、桜の聖母に育てていただいた。自分を知る先生方も多いため、桜の聖母から離れた大学時代について紹介しようと思う。

東北福祉大の卒業式にて。左から2番目が伊藤先生

大学時代を語る前に、私が養護教諭を目指した理由について、少し書いておきたい。幼い頃の私は飽き性で、何に興味があるかと聞かれたら「全部」と答えるような子どもだった。そんな私が小学校の頃から変わらずに抱いていた将来の夢が今の職業、養護教諭である。養護教諭になるには、看護や栄養、心理など様々な専門分野からの進路がある。その中でも私は、最も興味があった心理学を学べる大学へ進学し、養護教諭を目指した。そして進学先として選んだのが、東北福祉大学であった。

ちなみに出願締め切りの一カ月ほど前に、ようやく決めたと記憶している。一人暮らしをしてみたいが東京に行く自信がない私にとっては、もうここしかないという勢いでの決定だった（みなさんは余裕をもって進学先を決め、滑り止めの学校も考えましょう）。

そこから受験科目の国語、英語、面接を猛準備し、無事一次試験通過。そんなこんなで迎えた二次試験、課題のプレゼンテーションを終えた時、自分でもこれは受かったな、と思える出来だった。しかしその後の質疑応答の時間に突然、教授に鋭い指摘をされた。自分なりの回答をしたが、あまり納得いっていない表情の教授を見て、先ほどとは打って変わって不合格を覚悟し、大きく落胆した。

その後なぜか合格通知が届き、大学に入学すると、見覚えのあるあの教授が自分のゼミの教授だった。これはなかなかつらい大学生活になるのではと思ったが、心優しい友人たちに恵まれ、有意義な大学生活を送った。教授には、研究授業や看護実習、卒業研究のたびにたくさんの指導をしていただいた。そのたびに友人たちと夜遅くまで学校に残り、時に泣きながら作業をしたことは、いまだ生々しい。教授の研究室のドアをたたく前には、必ず深呼吸をする。それが当たり前になった頃、卒業を迎えた。

「10年後を想像して生きなさい」

大学の最後の授業で、教授に言われた言葉である。今、私はご縁があり、母校である桜の聖母学院高等学校で働くことができている。10年前の私は、母校で働く自分を想像できていなかった。10年後を想像し、生きることはとても難しい。しかし、10年後どうなっていたいか、どのような人生を送りたいかを考えて生きることは大切であると、教授の言葉に考えさせられた。

この記事を読む皆さんの中には、どうなっていたいかなんて分からない、やりたいことなんかないし、と思う人もいるだろう。そのようなあなたは、ぜひ将来のあなたのために、選択肢を広げる行動をとってほしいと思う。日々の勉強にとどまらず、視野を広げるために外に目を向けるのも良いだろう。今の皆さんが当たり前と思っている学校生活や出会いも、きっと10年後には自分を支えてくれる大切な財産になっているはずだから。恩師の言葉を少しお借りして、私がみなさんに伝えられる言葉としては、「10年後、どうなっていたいのかを想像して生きなさい」である。

人生100年時代！私自身も挑戦することを忘れず、「どうなりたいか」を追い求めながら、楽しんで生きていこうと思う。

編集後記

♪初めての取材、大学構内に入らないと分からないことを学ぶことができて良かった。（ペトロ）

✽取材を通してこんなに多くの学びを得られるとは驚きだった。（アンデレ）

☂夏休み中にたくさんの貴重な取材旅行、特別な夏になった。（大ヤコブ）

♥初めての取材は緊張したが良い経験だった。（ヨハネ）

♠取材がなければ会うことのなかった卒業生の先輩から話を聞けた。（フィリポ）

♣取材を通して視野が広がったみたい。（バルトロマイ）

☀県内にあっても普段は行けない施設の取材、貴重な経験だった。（トマス）

◆たくさんの新入部員を迎え、新聞部はますます盛り上がっています！（マタイ）

♫3年生最後の取材、学んだことをしっかり今後に生かしていきたい。（小ヤコブ）

❖新聞部史上最高級の取材で、有意義な高校生活最後の夏休みだった。（タダイ）

巛私たちの取材の様子が福島民報に載ってうれしいけど、もうこれで最後かと思うと寂しい。（シモン）

大学受験対策フェア実施中！
共通テスト対策はできていますか？
大学過去問・各社共通テスト対策など気軽にご相談下さい！
文化情報発信館
西澤書店
福島市大町7-20
Tel.024-522-0161
Fax.024-522-4139

大切な写真は
●広々とした空間を持つ —ファミリースタジオ—
●緑に包まれた —ガーデンスタジオ—
●絵画が楽しめる —サロンスタジオ—
PHOTO SALON
わが家のメモリーアート
ワタナベスタジオ
〒969-1612 福島県伊達郡桑折町字西大隅3-13
TEL024-582-3152 FAX024-582-3622